

新生児聴覚スクリーニング検査(自動 ABR 検査)について

私たちが生活する中で聞こえてくる、さまざまな音や言葉や音楽は、人と人とのコミュニケーションを助けるだけでなく、心を育て、楽しさを与えてくれます。



赤ちゃんの聴力検査はなぜ必要なの？

- ・赤ちゃんはお母さんのおなかの中にいる時から、お母さんの話しかける言葉や物音を聞いて育っています。これらは脳に学習されて言葉を覚える能力が発達していきます。また、お母さんが話しかける言葉は赤ちゃんを安心させて情緒を発達させます。
- ・言葉の発達は2歳に近づくとも本格的に始まりますので、赤ちゃんがおなかの中にいる時から1歳半ごろまでは大変重要な時期だといわれています。
- ・ところが、実際に2～3歳になって言葉が遅れることで難聴に気がつくケースが多いのが現状です。それは赤ちゃんの音に対する反応があいまいで、見逃してしまう場合があるからです。大切な時期によく聞こえず過ごしてしまうと、言葉を覚えたり音を聞き分ける能力や情緒が、十分に発達できないおそれがあります。
- ・生まれつき聴覚に障害のある赤ちゃんは500～1000人に一人といわれています。難聴がより早く発見できれば、治療とトレーニングによって言葉の遅れを最小限にできる赤ちゃんもいます。聴力の検査は、早ければ早いほどよく、入院中に行うことが理想的といわれています。

どのように検査するの？

検査は簡単です。

授乳の後や沐浴の後の赤ちゃんが眠っているときに、両耳にイヤホンと3か所に小さな電極を貼り付けます。イヤホンから小さなクリック音を出し、赤ちゃんのこの音に対する反応をネイタスアルゴ[®]という装置で測定します。

測定時間は2～8分で、結果は「Pass(パス)」か「Refer(要再検)」となって出てきます。

イヤホーンは赤ちゃんの耳にかぶせる構造ですので、びっくりさせたり耳穴を痛めたりしません。お薬も使用しません。わずかなクリック音と肌にやさしい電極は、赤ちゃんには全く影響ありませんので安心してください。

なぜ入院中に聴力検査をするの？



入院中に聴力検査を行う主な理由としては、次のことがあげられます。

1. 出生直後の赤ちゃんは眠っている時間が長く、検査を実施しやすい。
2. 検査に適した状態(ほ乳直後など)を選んで検査を実施できる。
3. 入院中は、再検査を実施しやすい。
4. ご両親への説明に十分な時間が取れる。
5. ベッドサイドで検査できるので、検査のための特別な場所は不要である。
6. 新生児期は、検査結果に影響を与える滲出性中耳炎が少ない。

もし「要再検」の結果が出たら？

「要再検」という結果は、「もう少し詳しく調べてください」という意味で、「要再検」の結果イコール「難聴」ではありません。健康診断で「要再検」の結果が出ても、精密検査では「異常なし」という場合があるのと同じです。

「要再検」の結果が出たら、翌日再検査します。2回繰り返し「要再検」の結果が出た場合には、当院小児科・耳鼻科と連携してさらに詳しい聴力検査を行い、退院後は専門機関へご紹介します。

万一難聴と診断されても、早期に診断され的確な治療とトレーニングを受ければ、普通の子供たちと同等もしくはそれに近づく言葉が発達します。

「パス」の結果が出たら？

検査時点では「パス」です。ただし、今後も引き続きお子様の聞こえに異常がないか注意されることをお勧めします。

検査費用は？

5,000 円です。